

父の介護

泉谷久美子

生きている間が花。よく聞く言葉だ。父もその一人だった。死んだらしまいやと口にかけていた。しかし、現在はどう受け止めるだろう。他界して三年。今、大阪の一等地、キューズモールの横のお墓に眠っている。庵治石のお墓にである。原産は四国。在庫も限られている石だ。いうなれば世界一高い墓石だ。オニキスより高い。黄金で作れば別だがね。自宅から片道二十分。車通りも多い。すぐにタクシーが拾える場所だ。タクシーを使えば参っても往復二十五分で往復できる。毎日でも会いに行ける。父は気付かなかったのだろう。そんな幸せがあるとは。次男坊だったから遺言だった。菩提寺に行くとき新しい土地がないと断られ、葬儀屋さんに勧められるままに、その時は泣きながら作った。一年後、キューズモールが出来た。往來する人数は大阪一となった。テレビで日本一高いビルも出来ると耳にした。一等地に立つ。そんなことを父は眠ったままどう感じているだろうか。起こしたいくらいだ。起こして、どう？って尋ねたいくらいだ。お父さんは幸せ者だ。周り中そう評価される。そう、父はキャラクターにもなった。没後にグッズも作った。榮之祐、特異な名前ゆえ、パソコン検索すると榮之祐ワールドと出てくる。世界発信されている。一人のお年寄りの物語。実話だ。人は亡くなって価値が出る。そんな言葉もよくある。それなら父の場合どうだろうか？ 平凡な人生であったか、なかったか。当人には決められないこともある。そう痛感した。歴史上の人物だってそんなものかもしれない。同じ時代に居た人は居るはず。父だって病室には何人だって患者が居た。その中の一人。九十五歳だった。天寿とて不思議ない。遺族だって泣くだけかもしれない。三回忌、七回忌の法要だけだろう。子供の数が多いだけが幸せではない。父は私一人しか子供に恵まれなかったし、孫も居ない。だがそのことについて愚痴は一つも言わなかった。介護してくれてありがとう。そう申した。父は要介護Ⅲだった。在宅介護だった。私はそばにいるしかない馬鹿娘だった。一つを除けば。

画家。父の人物がを描けた。それは世間のないストーリー展開となっていく。私は画家のみならず、漫画家という手段に出た。榮之祐物語・父と母と私の介護日記をパート5まで自費出版したのだ。驚いたのは世の中だった。放送局からも手紙がきた。出版社からも雑誌社からも。しかし、そこからの余力はその時の私にはなかった。四六時中つきつきりだった。父はただ笑っていた。晩年は笑顔だけだった。昔は短期で乱暴者だった。それがニコニコしておはよう、ゆっくりしと開口一番毎朝申す。私を労わった。娘だけでは介護は無理だと心配していた。でも父は私を一番頼りにしていた。例えヘルパーさんが入っても娘の名前を呼び続けた。目の前に居ないと大変だった。行き届いた生活だろう。自分の人物面に囲まれ冷蔵庫の付いた介護ベッド、介護モニターも設置した。テレビで在宅は月三万。施設は二十二万というが、逆だ。在宅は通院に介護タクシーが必要だ。まして駐車場に居て頂いたらメーカーがどんどん上がる。施設の様週に一回しか来ない医療体制とは違う。入歯が揺れる。それで歯医者。目やにが出るで、眼科。また通院で内科。時間は過ぎて行った。でもにつこり笑われると安堵感があった。まあ大丈夫だと安心した。世の中で虐待があってもどうでもよかった。自分の生活を守りたかった。守り抜き収まりたかった。他界という別れは突然だった。半日だけの入院で心不全だった。ピンク色の頬は笑っていた。苦しまない最期。人は死後価値が出るというのが事実なら父は特等席に招かれた一人だろう。近所の人から言われた、この家以上の物件が近所になかったからでしょうと。父の自力ではない。母の存在が大きい。亡くなった時にあの人は何一つ贅沢しない人だったから。せめてお墓はと申した。深い夫婦愛だった。連れ添って六十年。嫌なこともあつたらう。手をあげられたこともあつたらう。三回忌を過ぎた頃、近所の様子が違ってきた。景色が変わった。父の没後、老齢化した町の人々は次々と亡くなっていった。なのにお坊さんの出入りが無い。家だけだった。月命日のお参りは家だけ。その間に他界したお婆さんの家の庭が荒れ始めた。手入れの行き届いた造園だった。遺族が庭師を断ったのです。母がもう来年は花が咲くのは見れないわ、一回でも選定を止めると花は枯れるのよと申した。その方々は亡き人の行いを目にしていなかったのか。他にも空き家は放り出されたまま。いつのまにか不動産屋さんの手に渡っている。そんな例もあつた。身が凍った。戦前からの住居は壊れてゆく。当たり前前の生活がそこには存在しない。冷たい雪の日に、お婆様は庭に手を入れていた。花を咲かせ、人々はそのお婆様に礼を言った

ほどだ。それが消えた。そこだけではない。例えあげればきりが無い。誰も出入りしない家。放り出された家財道具。ある時、一件の前を通ると壁が塗り替えられていた。もう思い出はそこにはなかった。お子さんも居たはず。その家の年月はなんだったんだろう。家庭が壊れる。商売に失敗した訳でもなく、夜逃げした訳でもなく、愛人が居る訳でもない。普通の家庭。結末は小説より裸にむき出しに全体像をむき出す。円満な夫婦がそこにはなかった。いつもスーツとドレスの老夫婦の家庭は消えた。そこに愛情はなかった。温もりのない空間に人としての孤独な個性を見た。それも一件ではない、近所中だ。母と散歩する日を送る中で噂を聞く。八十近くの離婚。まさかそんなこと、事実だ。心に不透明な湧水が出てくる事件を聞かされた。ご主人様が事故を起こし逃げていた。そうしたら奥さんが追い出した。労わりのない。女で一つで男を追い出す。言葉がない。私が思っている家族は私の環境だけだった。テレビのニュースは氷山の一角。社会は音を立てずに壊れてゆく。営利目的でなく壊れる。金の切れ目が縁の切れ目でない。やっかいものが居る。そんな風にお互いを見る家族。考えられなかった。母の足元を見ながら歩き、父のことを語り合う。そんな光景はない。実在しない。一回の入院の度にプラスチックのコップを二つ、おむつと上着と洗濯物で走り回っていた私。しかし周りはお金で病院任せ。祭りもしない旅立ち。何が起こるか分からない時代はここまできている。母を守りながら小さな幸せを思う。「お母さん、私、お父さんに幸せになって欲しかったから在宅介護を選んだの」。知り合いは迷惑者と離れて行ったけどね。私は一つ真を通したかっただけ。偉くも何ともない。それが親への愛情よ。それだけ。見返りなんて親子にあるの。幸せって自分で掴むものでしょう。そして幸せの形って人それぞれでしょう。他人に何が分かるの。お父さんの苦労や苦しみ、家族に見せた愛情の何が見えてたっというのと、母に訴えた。母は頷き一歩一歩支えて歩く。亡くなった近所の跡地を散歩しながら、その亡き人の思い出を母は話す。この人セーターが上手くて、この人料理が上手くてと、そこは空き地。誰か知らない人が住むだろう。墓参りのタクシーで高台から家を見下ろす。古い家は無く、三階建ての家が並ぶ町風景。肩寄せ合って母子生きる。父の守ったものは私たちそのものだった。痛感した。父は守っていた。だから私たちが居る。私が守ったのではなくて、父は守っていた。確かに守ってくれていた。次は七回忌ね。そう話す母にまたいい年が来るわと口が続いた。母は満ち足りた笑顔で生きている。そこに父の陰が重なる。お父

さんもう一回人生があっても同じ道を歩むわと、母は言い切った。伴侶が太鼓判を押すのだからそうなのだろう。そして母自身もそうなのだろう。温かいスープを飲みながら家ついていいねと母がもらす。それは母が作った六十年間なのに。幸せにしてくれてありがとうと私が伝える。母は娘のあなたの力よと答える。波風の立たない原風景に一つの道筋を見ながらこのままで行こうと誓う。お父さん、言葉を聞くことは叶いません。でも、もし結果が全てならお父さんはお父さん自信が手にしたものを求めたのでしょうか。それは大変な努力で。あなたが不遇だったことは知っています。あなたの瞳に曲がりには現れなかった。屈折しない精神には徹底した人生観と人間愛がありました。それは家庭に現れています。あなたが親で良かった。ありがとう。そしてまたお幸せに。